

3. 円山川のあるべき姿とその実現を目指して

3.1 円山川のあるべき姿

但馬地方で生まれ育ち、生活の場としている人々やふるさととしている人々、あるいは、何らかの形でこの地域にゆかりを持った人々にとって、円山川は地域の核となる河川であり、身近なことが誇りとなるような河川であってほしいとのおもいを抱いて、流域委員会ではそのあるべき姿を求めて作業を進めてきた。

事実、円山川は兵庫県北部の但馬地方を代表する大河であり、但馬地方の歴史、文化、風土をはぐくみ、人々の暮らしを支えてきた。円山川河畔の湿地などで栽培された柳で作られた柳行李は現在、豊岡市の鞆産業の基礎となっている。また、円山川によって上流から運ばれた肥沃な土砂によってできた豊岡盆地は、その豊かな水の恵みも受けて、現在、但馬地方でも有数の穀倉地帯となっている。

円山川流域はコウノトリの日本最後の生息地となった地域であって、現在、兵庫県や豊岡市では地元住民の協力によりコウノトリの飼育、放鳥が行われているが、それを支えているのは第一に円山川やその周辺から山裾に広がる豊かな自然環境である。

このように円山川流域は、そこに住む人々が自然に対して畏敬の念を抱き、謙虚な態度でそれに接してきた地域であるが故に、今なお、豊かな生物多様性を維持し、わが国にあって最後までコウノトリの生息を許容してきた地域である。だからこそ、その下流部にある豊岡盆地は地域まるごとエコミュージアムとして存立していくという構想を立てることができる場所となり得たといえよう。

このような恵みを与えてくれる円山川は、一方で洪水による被害をもたらしてきた。近年では、平成 16 年 10 月に発生した台風 23 号による未曾有の洪水が円山川の堤防の決壊などを引き起こして、流域に暮らす人々に甚大な被害をもたらしたことは、生々しい記憶として残っている。

立て続けに水害を受けている地域にあっても、豊かな自然を守りながらその防止軽減に努め、それを果たすことのできる独創的な方策を立案し得た地域として、全国に向けて誇りがもてるような治水のあり方を、一部に被害をしわ寄せするのではなく、絶妙に洪水を分かち合える確実なシステムの構築によって達成することを目指してたゆまぬ工夫を重ねていくことが肝要である。

円山川流域委員会では、以上のような観点から、但馬地方の歴史、文化、風土をはぐくみ、人々の暮らしを支えてきた円山川の現状を把握し、明らかにされた様々な課題について議論を行い、その結果を今後、河川管理者が円山川の整備を行ううえでの道標となるものとして、以下のように円山川のあるべき姿をとりまとめた。

- ・ 住民が安全に、安心して暮せる円山川
- ・ 流域が一体となって、川の文化・情報を交流する円山川
- ・ 地域になじみ、人々に自然の恵みと安らぎを与える円山川
- ・ 美しい景観と豊かな自然が残る円山川
- ・ コウノトリが舞う円山川

但馬地方で暮らす人々が、但馬地方の歴史、文化、風土を継承し、より豊かなものとし、また、この地方にゆかりのある人々にとって円山川に接していたことが誇りとなるためには、これらに関わりを有する人々が相互に意思の疎通を図りながら、一部に犠牲を強いることなく、円山川を上に掲げたあるべき姿に着実に近づけていく努力を継続することが不可欠である。その円山川からの恵みを持続できるようにするには、自然に任せるだけではなくて適切な管理を加えることが必要であり、一方、洪水被害を減らすためには、水源地域から河口部まで公平・公正に住民の生命・財産を守る方策を見出し、実行することが重要である。このためには、円山川の整備は次節に示す基本的な考え方に従って行うことが必要となる。

3.2 円山川における河川整備のあり方について

(1)水害に強い地域づくり

円山川は豊岡市を中心とした下流域で被害が発生しやすい地形的特徴があるうえに、軟弱地盤など被害を軽減するための治水対策を進める上での制約が多い河川である。また、平成 16 年 10 月に発生した台風 23 号による災害のように、円山川では今後もこれまで経験したことのない洪水が発生する可能性が考えられる。このため、円山川では、水害に強い地域づくりを目指して、以下のような川づくりを行う必要がある。

人的被害の最小化をめざし、河道掘削や築堤などハード的な整備を行うことは従来どおり進めていかなければならない。しかしながら、ハード対策のみで水害を 100%なくすことには限界がある。そのために、ハード的な対応とソフト的な対応の両面で安全を確保する方策を充実させることが重要となる。

また、川は氾濫するという前提に立ち、「洪水の絶対的防御」から「洪水被害を減らす治水」へと意識転換を図り、それが一般的な認識になるよう住民からの理解を前提とした仕組みを治水対策に盛り込む必要がある。

円山川は上記のように直轄管理区間である下流域で被害が生じやすい地形的特徴があることから、下流域での流下能力の拡大とともに、上流域からの洪水流出量を減少させるなど、流域全体で洪水災害を減少させていくという視点は重要である。

平成 16 年 10 月の水害に対する意識や記憶が希薄化しないように努め、いつでも洪水災害が起こる可能性を流域社会全体が認識する必要がある。

これからの川づくりにおいては、洪水という自然の作用を力で押し込めるだけでなく、その自然の力を受容し、時には利用し、自然に謙虚に向き合って暮らす知恵を発揮する必要がある。そのために、大保恵堤などの先人の治水に対する考え方や工夫についても理解しておくことが必須のこととなる。

(2)流域一貫とした計画

河川が流域に降った水が自然に集まって下流に向かって流れていく水の通路である以上、それを対象とした整備計画は流域一貫の視点に立っていないなければならない。

流域一貫とした計画を進めるためには、流域の上流と下流において被害や費用を多様な形で分担するといった流域全体の公平性の考え方にに基づき、流域内の行政区分・管理境界を越えた連携を図らなければならない。これを可能とするためには流域全体で情報を共有し、上流域・下流域相互に状況を理解することが前提となる。

また、水防に関わる組織、コウノトリの野生復帰に取り組む自治体・NPO及び流域各地の文化資源保全団体等流域社会の様々な組織や活動に対して支援し、運営に協力し連携を図る必要がある。

さらに、流域全体の豊かな自然が保水力を高め、防災にも役立つことを認識し、各機関が連携して適正な土地利用の進展や、山林・農地の適切な管理に留意し、それに向かって努力することが必要である。

(3)地域になじんだ川づくり

円山川は、蓼川堰用水を始めとする、堰・頭首工からの取水によるかんがい用水などとしての水利用や、ボート・カヌー、川釣りなど、川遊びとしての水域利用、散策コースあるいは採草地としての空間的利用など、地域の人々の暮らしにとって重要な役割を担っている。また、かつては文人墨客が川面に船を浮かべ、近年まで川漁師による漁も盛んであって、水辺で遊ぶ子供たちの姿もあちこちで見かけられた。しかしながら、道路等の交通網の整備によって舟運が衰退し、地域社会や生活形態の変貌とともに子供たちが川に近づかなくなり、川で漁をする姿やコリヤナギを採取する姿も減るなど、円山川と人々の係わり方が以前と変わってきていることは否めない。

このように、円山川は、時代時代の社会状況や生活様式に呼応しながら但馬地域の人々との日常的に関わりを持ち、その関わりを通じて人々の生活・文化に大きな影響を与えてきたものである。それ故、常に目にする円山川のあるべき姿をおもい描くと、地域性や歴史性などの特色を踏まえて、それが川の姿から理解できるような地域になじんだ川づくりを目指さなければならない。

そのため、円山川沿川の歴史的・文化的伝承や施設の保存・保全、円山川改修事業の継承等円山川を巡る様々なことがらを語り継ぐことが必要である。

(4)景観や豊かな自然環境の保全・再生・創出（生物多様性円山川戦略の策定に向けて）

円山川には国内で有数の丸石河原のカワラハハコ群落、エノキなどの河畔林、ツバメのねぐらとなるヨシ原、アユが遡上しサケが産卵する河道などの優れた景観や生態系が存在し、それらの生態系には多数の生物が生活している。その一方で、絶滅のおそれのある生物の増加や外来種の侵入といった問題が発生している。

これらの円山川を特徴づけている豊かな生物多様性を保全し、課題のある地点については自然の再生・創出を行う必要がある。円山川の豊かな自然環境の保全・再生・創出にあたっては、まず円山川全体、流域全体の自然環境のあり方、すなわち円山川の流域全体における生物多様性保全の方向性を定めるべきであろう。国では新・生物多様性国家戦略が平成14年3月に関係閣僚会議で決定され、現在、さらにその戦略の見直しが進められている。このような戦略の円山川版ともいえる生物多様性円山川戦略の策定に向けて体制を整えることが望まれている。河川整備計画はこの戦略の策定とその展開に資するものであるべきである。

(5)円山川らしさへの配慮

円山川流域は、国の天然記念物コウノトリの我が国最後の生息地であり、現在、野生に復帰させる事業が豊岡市、兵庫県等により強力に推し進められている。円山川は、コウノトリが羽ばたける豊かな環境の重要な要素・基盤であって、そのための自然環境の整備はいうまでもないが、それを行うだけでなく、コウノトリを豊かな優れた環境のシンボルとした整備でなければならない。

すなわち、コウノトリと人が共生できる環境と多様な生物の生息・生育環境の復元を目

指すなかで円山川が流域と一体となった自然環境の再生を支援し一翼を担うことができる整備がなされなければならない。



図 3.1 コウノトリ